

ニーズに合っていますか？

災害はみんなを襲います。でもそのニーズはその人の特徴によって異なります。熊本地震でも、厳しい避難生活で命を落とす災害関連死が大きな問題となりました。そのほかに、健康を害した人、精神的につらい日々を過ごし、その後の生活に影響があった人もいます。

多様な人のニーズに丁寧に対応していくことが、命と健康、そして尊厳を守り、被害の拡大を防ぐ近道です。

発災直後に支給される食事は、パンやおにぎりなどが続きがち。熊本市では被災者のニーズに合わせたメニューに改善し、健康状態も確認しました。(2016年5月27日付の熊本日日新聞)



支援の質を低下させる起こりがちな例

支援物資として古着が大量に送られている



被災者のニーズは多様です。関係者と継続的にコミュニケーションをとり、被災地の受け入れ態勢も確認したうえで、必要な支援を届けましょう。

チェック

- ✔ 支援者は、被災者の性別や年代、障がいの有無等によって異なるニーズを持つ方々であることを念頭に、丁寧にニーズを把握しようとしていますか？
- ✔ 支援者は、被災者のニーズが満たされることはもちろんのこと、心身状態の悪化等、二次的被害に遭わないように十分に注意して対応していますか？
- ✔ 支援者は、被災者と継続的にコミュニケーションをとり、支援内容が被災者の負担になっていないか確認していますか？

取り組み事例

熊本地震

多様性に配慮した避難所のエリア分けで、尊厳と命を守る

緊急期

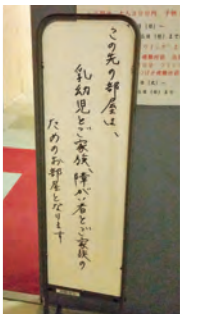
認定NPO法人 難民支援協会(JAR)



段ボールのベッドとパーテーションで、世帯ごとに配置した様子 ©JAR

避難所で暮らす方たちの多様性に配慮し、子どもがいる家族、介護が必要な家族、高齢者等、属性に合わせたエリア分けと設備(段ボールベッド、洋式トイレ等)を導入しました。その際、当事者に相談し、障がい者や乳児がいる家族のためのスペースを確保、ジェンダーに配慮した衛生用品や女性のための相談ホットラインカードのトイレへの設置等を行いました。

また避難者主体の運営に移行するため、炊き出し準備や配食、トイレ環境改善等に避難者の参加を促進。さらに行政職員向けに、東日本大震災時の避難所運営者を招き、運営に悩む担当者が相談できる機会を設けました。



多様性に配慮した避難所内スペースの案内 ©JAR

支援者の知恵

- 「支援が届いていない人がいるかもしれない」という視点を持っていた。
- 適切なアプローチ方法がわからない場合は、必ず専門家や詳しい支援団体に問い合わせ、アドバイスを仰いだ。
- 避難者主体の運営を大切にしました。

熊本地震

子どもたちの心のケアを、地域で担うために

緊急期

認定NPO法人 世界の医療団(メドゥサン・デュ・モンド ジャパン)(Mdm)



親子カフェの様子 ©Mdm

災害で遊びを通じた日常生活への回帰の後押しとして、子どもたちに安全な遊び場を提供しました。保護者および学校教諭向けには、子どもの心の変化に応じた接し方、自らのストレスへの対処法の勉強会を開催し、被災後に生じる子どもの変化に適切かつスムーズに対応できるようにしました。

告知には、「メンタルヘルス」という語を使用せず「親子カフェ」と称し、被災前からなじみ深い公的な施設を利用することで、参加しやすくなりました。

支援者の知恵

- 地元医療関係者やボランティア団体との連携のもと、被災地の事情に通じた専門家を地元のニーズに合わせて、遅滞なく確保することができた。
- 被災地で中心となって活動していた人材と連携することで、撤退後の引き継ぎ先を確保できた。